

ポンペイは「十月に消えた」

増山雄三

「ポンペイ」という町は、イタリア南部にあった古代都市だが、現在のカンパニア州ナポリ県ナポリに同名の町があり、その西方に古代ポンペイの町全体が「古代遺跡」として保存されていて、一九七七年には、世界遺産の文化遺産として登録されている。

この遺跡の発掘は、十六世紀なかばになつて、土に埋もれた古代都市の存在が発見され、一七四八年に発掘が開始され、発掘に伴つて、古代ローマ時代の都市生活実態が驚くほど明瞭にされてきた。

現在出羽その八割が発掘され、巨大な遺跡公園として、火山灰に埋もれる直前の街の佇まいが、そのまま再現されていて、広場を囲む、アポロ、ユピテルの各寝殿、そして三角広場の大小の劇場、一万五千人収容の大闘技

場等の大建築がある。

さらに、車道と歩道が区別され横断歩道すらある道路、また食糧雑貨の小売店や酒場もあり、その先には、裕福な商人ウエチーの家もあるほか日用品なども多数発掘され、まさにポンペイは、古代ローマ人の生活を知るための、宝庫になっていると言えよう。

そこは、「ベスビオ山」東山麓の肥沃な土地で、ナポリ湾に近く交通の要地でもあったために、古くイタリア先住のオスク人が集落を作っていて、紀元前八世紀には、ギリシャの植民者が来住し、翌年にはエトルリア人も移住して都市国家に成長し、貴族共和制になって、ギリシャ神殿もでき家屋も増えた。

それで、オスク、ギリシャ文化が盛んになっていき、それが広場や家屋のモザイク模様になそれが現れ、市域も拡大して城壁も作られて、紀元前四年にローマ帝国の進出により、その支配下にはいったのである。

ところで、西暦七九年のベスビオ山の噴火

によつて、多くの火山灰により埋没したこのポンペイの町は、近年、その噴火の発生日が、長い間に定説だった「八月二十四日」ではなく、「十月二十四日」との説が、有力視されるようになったのである。

ポンペイは山の南麓の傾斜地に造られた街だったが、街路は、下水の排水路としても使われていたが、勾配の変化や余分の上水を活用するなどの工夫もされていて、山の北麓では、ワイン生産設備の遺構に加え、その床下からは、より古い街が見つかるなどという、発見がいま相次いでいる。

紀元一世紀の、ローマ帝国の政治家で文人でもある小プリニウスは、二十数年前の七年八月二十四日の出来事として、南イタリアのナポリ湾対岸のから見た、ベスビオ山の噴火を、友人のタキトゥス宛ての書簡の中に、「その雲煙の形は、他のいかなる木よりも、松のキにそっくりだ」と記している。

噴煙は山の南側一帯に広がり、火口から約

十^キ南東にあったポンペイの街は、火山灰や火砕流にのまれ、一夜にして多くの市民とともに埋没してしまった。

一方、小プリニウスの叔父で、ローマ艦隊司令官でもあった大プリニウスは、別の港町で助けを求めた知人の救出に向かうが、彼は被災してしまつて命を落とした。

この書簡から、噴火の発生は長い間「八月二十四日」が定説とされ^tきたが、以前からそれより二か月後の「十月二十四日」説があり、近年はそれが有力視されている。

二〇一八年には、ポンペイの邸宅跡の壁から八月二十四以降の市民の存在を示す「十一月朔日の十六日前」と書かれた落書きが発見され「十月説」を裏付けるものとして、それが世界中に報道されたのである。

半世紀にわたり、ポンペイの発掘調査を手掛けてきた、古典考古学者の青柳東大名誉教授は、「研究者の間でも、小プリニウスの書簡は、何度も写本されている間に、日付が写

し間違えられたと見られている」と話す。

また青柳さんは、十月の噴火を物語る遺物
ちして、①石膏で復元された遺体の多くは着
衣が厚着だった②邸宅跡の部屋から多くの火
鉢が見つかった③ワイン醸造用の大甕の全て
に蓋がされ発酵段階だった等を指摘し、あら
ゆる状況証拠が合致すると説明する。

ポンペイは、先述の様に、紀元前八世紀に
街が作られ、全周を約三^キの壁で囲われた街
は、ワインや毛織物に魚醤の産地として繁栄
し、上下水道も整備され、神殿や劇場に円形
闘技場、それに浴場などの公共建築の外、パ
ン屋や居酒屋と娼館なども並び、富裕層や庶
民それに奴隷ら、約一万人が暮らしていた。

その状況は、上野にある国立博物館に、噴
火前のベスビオ山と、ワイン用のブドウ棚や
酒の神を描いた、フレスコ画を始め、貴重な
遺物など約百五十点もあり、それによって、
当時の人々の暮らしが分る。

ポンペイでは、その当時に綿密な都市管理

が行われていた事も分っていて、特に下水は堅い石畳の街路に、そのまま排水しており、汚物や廃棄物の清掃が問題だった。

レーザースキヤナを使って、当時の排水状況を調査した九大の堀教授は、街路の清掃には雨水のほか、高地にあった配水棟から斜面を利用して供給される、上水の一部も使われたほか、上水の噴水施設からの余剰水が街路に流れ、汚物を流していたと見ている。

また堀さんは、ポンペイでは繊細な高低差を計算し、街路に水を流していたし、急な勾配の上にある市街地の地下に、下水設備を造るのは予算的に困難なので、お金をかけず、現実的手法で解決していたという。

そして、街路には歩行者専用の飛び石が置かれ、敷石には、所々で荷車などが通った轍の跡が残っていて、昨年は儀礼用の四輪馬車も発見されているので、堀教授は、道路も用途別に整備されていた可能性がある、その結果について説明を加える。

